

23.4.6－7 打田幹事長、岩手県慰問視察

岩手県沿岸部の被災神社を視察して

神道政治連盟幹事長 打田文博

<現況と人々の思ひ>

去る四月六日、東北地方太平洋沖地震による大津波の被害に遭はれた岩手県沿岸部の見舞ひと視察をおこなった。今回は岩手県神社庁（西館勲庁長）を慰問した後、北は上閉伊郡山田町から南は陸前高田市まで、被災神社数社を慰問し街並を視察した。

沿岸部は有名なリアス式海岸であり、各々の湾で津波被害により広範囲に亙り街が壊滅し、言葉にならないほどの凄惨な現場を目の当たりにしてきた。

その視察の中で、神職と神社関係者数人に現況を伺って感じたことや、今回の津波による被害の特徴を報告するとともに、さらには今後の課題について私見を述べたい。

<「今年の秋祭りは」>

上閉伊郡山田町の八幡宮（佐藤明徳宮司）は、鳥居の目の前までであった街がすべて津波で壊滅し、同時に火災も発生したため、異臭に加へ焦げ臭さも残ってゐたが、社殿に大きな被害はなかった。

佐藤宮司によれば、漁師町が点在する岩手県沿岸部の一帯は、自宅と自分の船に各々神宮大麻を祀るほど氏子の信仰が篤く、とくに祭り好きな氏子が多いといふ。さらに、「すでに氏子の数人から、街が壊滅した状況にも拘らず、今年の秋祭りがおこなはれるかと前向きな質問を受けた。街には店が一軒もなくなったので、神社で地元のお祭りのビデオを放映し、氏子の憩ひの場所として、復興の気運を盛り上げたい」とのお話を伺ひ、改めて震災復興における神社の役割を考へさせられた。

<徐々に参拝者も>

上閉伊郡大槌町の小鎚神社（松橋陸之進宮司）でも地震・津波・火災の被害に遭ひ、氏子地域の状況は山田町の八幡宮とほぼ類似してゐたが、社務所を避難所として提供してをり、二十人あまりが避難してゐた。

ここでは松橋宮司の奥様から、眼前の街で発生した火災が鎮守の柱に飛び火し、ひじょうに危険な状況に陥った際のお話を伺った。そのお話によれば、「宮司は神社をお守りするため、神社を離れないと聞かなかつたが、氏子の皆様の強い説得により高台の安全な場所に誘導された。残った氏子数人が消火活動に徹してくれたおかげで社殿は守られた」といふ。

また現在の状況として、「氏子の多くはここから少し離れた避難所で生活をしてゐるが、最近参拝者が少しづつやってくるやうになった。さらに高い堤防を築くなど検討を重ねれば、ここに氏子が戻ってくるかもしれない」とのお話も伺った。

<避難生活の中で>

陸前高田市気仙町の月山神社（荒木真水宮司）は、やはり津波により氏子地域が壊滅し、社務所には同町の諏訪神社（河野允幸宮司、社務所流失）と今泉天満宮（荒木真幸宮司、社殿等流失）二社の氏子を中心に約百三十人が避難生活をしてゐた。ここでは月山神社の荒木道明権禰宜と諏訪神社河野宮司の奥様にお話しを伺ふことができた。

月山神社荒木権禰宜は、地元の消防団に所属してをり、日中は遺体の搜索活動などをおこなひ、夜は仲間と交代で地域の警戒にあたってゐるとのことであつた。また、諏訪神社の河野宮司はたいへん残念なことに津波の犠牲となつたが、その奥様は月山神社の避難所で陣頭指揮を執ってをられた。

<気丈に陣頭指揮>

河野宮司は津波の際、気仙川にかかる決壊した姉齒橋付近を車で走行してゐたといふ。奥様が数キロ離れた遺体安置所に徒歩で赴き搜索をする中、津波から十日目に遺体を見つけることができたのだと伺った。奥様の「まさに十日祭に当たる日であつたことに、神様にお仕へする者として言葉にはできない何かを感じた。しかし、社務所兼自宅も流され、これからどうやって生きていけばいいのか」と

の言葉に胸が詰まった。

しかし、河野宮司の奥様は、このやうな辛苦の境遇であるにも拘らず、神職の妻として氏子に範を示すべく、自ら陣頭指揮にあたり、気丈かつ品位あふれる態度で対応されてゐた。このことに深く敬服した次第である。

<大津波からの復興>

被災地では、すでに地元の特産品である牡蠣や帆立の養殖用筏や漁船が少しづつ海に戻りつつある様子を見ることができた。ある漁師は、「津波は家も家族も奪ってしまってしまったが、我々に海だけは残してくれた」と語ったさうである。被災地の人々は、我々が思つてゐる以上にたくましくも感じた。

しかし、現実には悲しみと不安を胸におさへ、少しづつ日々の生活を取り戻してゐる段階なのである。そんな中、子供たちが元気であることに希望の光を見るやうで、少しうれしかった。また、被災地に一日でも早く活気を戻すためにも、「自粛の風潮に流されただけの自粛はやめてほしい」との現地の声からは、被災地の「今の思ひ」がその他の地域で正しく理解されてゐないとの念を深くした。

東日本大震災による被害の特徴は、過去に代表される阪神・淡路大震災や新潟県中越地震などとは異なり、想定外といはれる大規模な津波であらう。神社においては残念ながら流失した神社が数社あったが、視察先では幸ひにしてそのほとんどが高台に位置してをり、また地震による倒壊もほとんどなく、社殿は普段と変はらぬ姿のままであった。しかし、氏子区域は瓦礫の山となつたり、あるいは流失により更地のやうになつてしまつたりしてゐる。

そして、多くの氏子が家族と財産を失ひ、近くの神社や小学校などで避難生活を送つてゐる。地域差はあるものの、氏子区域の復旧なくしては神社の復興も見通しがつきにくい状況にある。

<今後の課題は>

政府は、街づくりの具体策を練る復興構想会議を発足させ、高台の山を削り住民を移転させ、低地の水産会社や漁港に通勤させるなどの構想を検討する意向を示した。しかし、神社は変らない姿のまま存在してゐるにも拘らず、氏子が神社から離れた場所に移転させられることになれば、神社は存続の危機にたたされることにもなりかねない。

津波による被害の規模は街々によって異なり、政府の一方的な移住策の発表は、かへつて被災者の不安を掻き立ててゐるのである。神政連としては、神社存立の原点である氏子氏神の関係を如何に維持していくべきかを念頭に、政府の動きに注視してまゐる所存である。

また、神職の養成についても考へねばならない。兼務神職が多いなか、氏子ともどもに職を失ひ収入源を絶たれた状態で、後継者を如何に育成していくかといふことも今後の大きな課題である。一方、直近の問題として、春祭りの季節を前に、装束や祭具が流されてしまった同志がゐる現実も忘れてはならない。

神社本庁では、早速災害対策本部を立ち上げていただいた。とくに神社や神職に関することは、この対策本部がキーステーションとなり、正確な情報を収集し、的確な指示のもと全組織的な支援体制をつくり活動することが合理的だと考へる。

対策とは、相手の状況に応じてとる方策のことで、その客体とは被災神社であり、被災した神職や氏子たちの生活や心でなければならぬ。今こそ斯界が団結する時のやうに思へてならない。